

2014年4月12日ヨハネ研究の森コース聖歌隊は、株式会社シオザワの塩澤好久さま主催の「できる人が、できることを、できるだけやる」東日本大震災復興支援ボランティア「3Dプロジェクト」に参加しました。いわき市で行われた復興支援コンサートではサックス奏者の三四朗さんたちと共演し、多くの方に合唱を届けることができました。



東日本大震災復興支援コンサート

「春を呼ぶ サックスの夕べ 三四朗と仲間達」

他人のために尽くす喜び

高校三年男子



「自分にとって、ボランティアとは何なのか」。いわきへ出発する前日、全体でその事を考えるセッションが行われた。もう一度東日本大震災に関する映像を見て、改めて考えを巡らせました。「僕はなぜ、明日いわきへ行って歌を歌うのか」、自分の行動の意味を問い直すために、素直に肌で感じる感覚を大切にしようとして心に決めてそのセッションを終えました。

当日、本番の約三時間の間は感動の連続で心が落ち着きませんでした。けれど

も、僕が一番美しいと感じたのは、本番終了後にお客さんをお見送りをしている時のことでした。

聖歌隊メンバーは本番を終えたとすぐに会場の出口の方へ向かい、列をつかって帰られるお客さんのお見送りをしていました。

しばらくして、観客として参加していた他のヨハネ生が続々と出てくると、何人かの中学生が僕の目の前で一緒に列をつくり始めたのです。それも、誰かに言われたからという訳でもなく、自然と身体が動いているように見えました。

そして、通りかかるお客さんに対して僕たちと一緒にになって、笑顔で「ありがとうございますございました」と言ってお見送りをしていました。

その時僕は、誰かのために何かをしている姿という

のは、疑いなく美しいのだということ、そして本人にとってそれは紛れもない喜びであるということを感じました。

復興支援のために、本気になって演奏をしている三四朗さんやミュージシャンの方々。歌った、歌っていない関係なく、同じヨハネ生として見送りをした人たち。そして聖歌隊として自分の出来る事をして相手が笑顔になる経験を、純粋に喜びとしていたのだと思います。

決して見返りや利害の一致を求めている訳ではないのに、人は他人のために何かしてあげたいと思う瞬間が必ずある。僕にとってボランティアとは、そんな人間にとって大切な生き方を思い出させてくれる機会なのだと思えました。

つづいていくぬくもり

高校三年女子



バスの車窓からのぞく桜の花景色に、目を奪われる。四月十二日、心地よい日差しがさすあたかな朝に、私たちは、バスにのって福島県いわき市へ向かった。三四朗さん主催の復興支援コンサートに参加するためだ。

このコンサートには、被災地の方、また、被災地を支えようと協力してくださる方々がたくさん見に来ていた。その姿を見て、私たちも必死で歌の練習を積み重ねてきたものの、プロのミュージシャンの方々の足をひっぱってしまうのではないかと不安を抱いていた。しかし、そんな不安をよそに私たちの出番はやってくる。一曲一曲、とにかく精一杯想いをのせてうたった。会場の人々の、唾を飲み込む音が聞こえてきそうな一体感。そして、スポットライトが少し暗くなったとき、壇上の上から、多くの被災地の方が涙している姿が見えた。

なんとかコンサートが終わり、会場の外に並んでいると、たくさんの方が「頑張ってる」と握手をしに来てくださった。私はそのとき、被災地のために何かをするつもりで参加したボランティアで、生きる、ということについて、たくさんの方々とを学ばされたのだ。過去にすがって泣くのではなく、未来を生きる、ということ。私たちはこれからも生きていかなくはならない、ということ。

